



自然の営み

今が旬の柿。

「柿は渋きより甘きに入り、人は甘きより渋きに入る」

明治文壇の鬼才、斎藤緑雨の言葉です。

渋柿は熟すと甘くなり、逆に人間は年月を経ると渋みが出てくるといわれます。面白い対比ですが、わが身を振り返ればまだまだ甘さが目立つようで恥ずかしい限りです。

辛辣（しんらつ）な警句を数多く残した緑雨のことですから、人はなかなか熟さないもの、という皮肉を込めたのかもしれない。

今年も柿がたくさん枝に残されています。近隣の人から庭先になっている柿をいただき、美味しく食べた子どものころを思い出します。

誰にも収穫されず、熟して地面に落ちる日を待っている柿を思うと、実にもったいない感じがします。

ドングリとはブナ科の木の

実の総称です。

作家いわさゆうこさんの著書に「どんぐり見聞録（山と溪谷社）」という楽しい本があります。その中で興味深いのは、ドングリとこれを食べる動物たちの「せめぎ合い」が語られていることです。

ブナ科の木は5年から7年に1度「大なり年」といって、全ての木が一斉に大量の実を落とします。1本のクヌギから1万個の実を落下させることもあり、ドングリが好物のクマ、リス、野ネズミといった動物たちはこの「ごちそう」に群がります。それでも食べきれず残ったドングリが、やがて芽を出し大きな木に育っていきまます。

その年、腹一杯になった動物たちは子どもを産み育てますが、翌年はドングリの実が少なく餓死することさえあります。

「大なり年」があるのは、

毎年同じように実を落としていては全部食べられてしまうから、というブナの「知恵」のようです。芽の成長が思わしくないと見ると、2年後にもう一度、大なり年を設けることさえあるといえますから実に不思議です。

最近、人家近くにクマが出没している様子が報道されています。豊作の年に増えたクマの食べ物が足りず、人里近くに出没しているのかもしれない。

ブナの木に「もう少しクマに餌をやって」と注文したくもなりません。

枝に残された多くの柿に、もったいないと思うのは私だけでしょうか。

指宿市長 豊留悦男

